

愛しているのなら繁殖制限

猫や犬は人が大昔に自然から切り離し、人と一緒に生活するように体のつくりも習性も変えた動物です。適正な数になるように自然環境が繁殖をコントロールしている野生動物ではありません。猫や犬の幸せを保てるよう、数が多くなりすぎないように繁殖をコントロールするのは人の義務であり責任なのです。猫や犬は本能で繁殖するだけで、自分で数をコントロールすることはできません。あなたの猫や犬の繁殖をコントロールできるのは飼い主であるあなただけです。ほんとうに猫や犬を愛しているのなら、安易に生ませたり、繁殖を放置したりしてはいけません。

不妊去勢手術

望まない繁殖を防ぐ最も確実な方法は不妊去勢手術です。不妊去勢手術には利点と欠点（下表）がありますが、他に繁殖を防ぐ確実な方法がとれないのなら行うべきでしょう。猫や犬の不妊去勢手術の時期は生後6か月以降といわれていますが、近年はそれより早い月齢でも問題なくできるとの報告もあります。最初の発情（繁殖シーズン）の前にすると病気など様々なリスクを軽減することができます。個々の動物の適期は、動物の発育状態や健康状態にもよりますので、詳しくは動物病院の獣医師に相談してください。

■不妊去勢手術の主な利点と欠点

	メスの不妊手術（卵巣と子宮の除去）	オスの去勢手術（精巣の除去）
利点	<ul style="list-style-type: none"> ○望まない妊娠がなくなる。 ○卵巣、子宮の病気のリスクがなくなる。 ○性ホルモンに関係する乳腺腫瘍などの病気のリスクが低くなる。 ○発情期特有の困った行動がなくなる。（猫では大きな鳴き声、トイレ以外での排尿、外に出たがるなど。犬では出血で部屋をよごす、外に出たがる、飼い主のいうことを聞かないなど。） ○様々なリスクが軽減することにより、寿命が延びる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○望まない交尾がなくなる。 ○精巣の病気や前立腺肥大（犬）のリスクがなくなる。 ○性ホルモンに関係する肛門嚢腫（犬）などの病気のリスクが低くなる。 ○メスへの興味によるストレスが軽くなる。 ○猫では発情期特有の困った行動がなくなる。（大きな鳴き声、マーキング、外に出たがる、ケンカなど。） ○オス同士の競争による攻撃性が低下する。 ○猫エイズなどケンカや交尾で感染する病気のリスクが低くなる。 ○様々なリスクが軽減することにより、寿命が延びる。
欠点	<ul style="list-style-type: none"> ●手術の麻酔のリスクがある。（適切な麻酔管理で軽減できる。） ●肥満傾向になる。（適切な栄養管理で防げる。） ●犬では尿失禁の発生率が上がる。（薬で治療できる。） 	<ul style="list-style-type: none"> ●手術の麻酔のリスクがある。（適切な麻酔管理で軽減できる。） ●肥満傾向になる。（適切な栄養管理で防げる。）

突 然の災害で避難しなくてはならないとき、飼っている動物は飼い主と一緒に避難すること（同行避難）にしている自治体が増えています。万一の時に連れて避難できる数以上の動物をかかえこまないようにすることが大切です。

避難した後は、混雑する避難所で一緒に生活するか、動物を仮設のシェルターに預けることとなりますが、いずれも普段の生活環境とはかけ離れた状況で、知らない人や動物と一緒に暮らすことを余儀なくされます。人は理性で状況を理解できますが、動物は住み慣れた環境から離れた理由もわからず、そのストレスは相当大きいものです。

普段から万一に備え、移動用ケージやキャリーバッグに慣らしたり、他

の動物とつきあえる社会性を身につけさせたりしておきましょう。

不妊去勢は避難先でのストレスを軽くします

不妊去勢をしておくこと、多くの動物と一緒に暮らさなくてはならない避難所やシェルターでの性的なストレスを軽減することができます。また、シェルターで動物の世話をするスタッフやボランティアにとっても、不妊去勢をしていない動物を世話するのは大きな負担となりますから、不妊去勢をしておくことは人手も物資も不足しがちなシェルター運営を円滑にし、収容された動物がより快適に過ごせることにもなります。

災害という特殊な状況では飼っている動物が飼い主の元から離れてし

まう事態も考えられますが、ノラ猫やノラ犬になって繁殖して復興の支障になったり、動物の種類によっては野外で繁殖すると自然環境に取り返しのつかない悪影響を及ぼしたりすることもあります。これらも不妊去勢をしていれば、防ぐことができます。

